

神 殿 講 話

三 幣 輝 子 理 事



神 殿 講 話 要 旨

今年は平成から令和に変わりました。その時テレビの街頭インタビューで「令和はどんな年にしたいですか」との質問に、ほとんどの人が「戦争のない、平和で安心して暮らせる世の中になりたい」と答えていました。しかし今年も自然災害が多発し、決して安心という訳には行きませんでした。特に台風15号は、関東に上陸したものととしては観測史上最強クラスとの事で、今までに経験したことのない程の威力で、教会が飛ばされるのではないかと不安でした。翌日のニュースで、家の屋根が飛んだり、鉄塔が倒れたり、信じられない光景が報道されました。広範囲の地域で残暑厳しい中、電柱なども倒れて、長期に渡り停電が続きました。

水と電気は生活する上では基本的な欠かせないものです。いつでも蛇口をひねれば水が出て、スイッチ一つで明かりが付く。それが当たり前。たとえ何かで寸断されてもすぐに元に戻るのが当たり前と思ってきました。しかしこの度は、そう簡単なものではありません。復旧に時間がかかり、残暑が続く、電化製品や風呂が使えず大変不自由だったと思います。電気が使えなければ、電化製品はただの置物です。ほとんどの物は電気に頼っていることがよく分かりました。電気も水も神様のお恵み、お与えです。何でも当たり前前になつていたことに改めて気付かされます。

埋め尽くし、泥が入り込んだ家の前で、茫然と立ち尽くす人たちが映し出されました。そんなニュースを見て、ボランティアの人々が、全国から駆けつけて来ました。中には自分が被災した時に助けてもらったので、今度は自分が役に立ちたいと思つて来たのだという人もいました。悲惨な光景の中ではありませんが、人間は皆兄弟であり、お互いに助け合うように親神様はお創り下さったのだということが、つくづく素晴らしいな、有難いなと思わせて頂きました。

災害に関して、おふでさき第8号58〜63までに、このように詠まれています。

かみなりもぢしんをふかぜ
水つきも これわ月日のざね
んりいふく (八―58)

この事をいまゝでたれもし
らんから このたび月日さき
ゑしらす (八―59)

月日にハみな一れつハわが
子なり かハイ、ばいをもて
いれとも (八―60)

一れつハみなめへく、のむ
ねのうち ほこりいゝばいつ
もりあるから (八―61)

このほこりすきやかそふぢ
せん事に 月日いかほどをも
ふたるとて (八―62)

月日よりこわきあふなきみ
ちすじを あんぢていれども
へくしらすに (八―63)

とあります。

あの怒り狂った激しい暴風雨は、まさに残念・立腹の表れとしか言いようがありません。とても人間の知恵や力で太刀打ちできるものではありません。

台風が去った後には、大量のゴミと泥が残されました。泥水に浸かってしまった家屋の復旧に、まず床下の泥をかき出す作業が行われましたが、この泥が大変重く、取り除きにくい厄介な物として、作業をてこずらせている様子をテレビで見ると、「よくにきりないどろ水や 心すみきれごくらくや」という十下り目四ツのおうたが心に浮かびました。欲は際限がない、泥水のようなものである、泥をかき出して心が澄みきつたなら、極楽の境地になるという意味です。欲の心とは濁った泥水のようなものですから、欲にまみれてしまうと、泥水の中に居るようなもので、視界が利かず

周囲のことが何も見えない状態です。周囲が見えないと、隣に困っている人、助けを求めている人がいても、気付かないし、自分が周囲に迷惑をかけても気づきません。自分がどこに向かつて歩いているのかも分からなくなり、逆澄みきつた心は、澄みきつた水のように、何事もすつきりとよく見えて判断を誤ることはありません。周囲のこともよく見えます。この欲の手振りは、物を自分の方へかき寄せるようにします。私達が自分中心に考え、人も物も全て自分に寄せるような心でいることが、泥水のように心を濁らす原因になる事を教えて下さっています。

親神様はこのようなほこりが積もつたままでは、どれ程子供が可愛くてもたすけてやれない。ほこりが一杯の心でいると、先で怖い危険な道を通ることになる。それを親神は案じているのだが、皆さんなことを知らずに暮らしている、との仰せであります。ほこりの中でも厄介なのは、泥水に例えられる欲のほこりで、全てのほこりの底にあるほこ